B 124　着用実験の判定に関する研究

お茶の水女子大学　○長谷部ヤエ　山路博子　愛知教育大　古橋祥子

目的　身体に適合する衣服原型を設計するために官能検査法を用いた実験的研究が行われている。従来、精度のよい結果を得るために判定方法を変えたり、判定者についての検討を行っている。今回は被服の設計・製作の経験に差のある者を判定者として選び、それがどのように影響しているかについて検討した。

方法　着用実験における判定者をAグループ：被服の設計・製作の経験の深い教官3名、Bグループ：その経験がわずかある学生4名とした。実験の要因は被検者の体型、胸幅、背幅、袖山の高さの4因子でそれぞれ3水準とし直交表に割りつけた。測定した特性値は前身頃、後身頃、袖とし、判定は一対比較法によりclosed panelおよびopen panelで各々2回行った。解析法は判定者別に先ず累積法により分散分析を行い、SN比を求め、次いで、判定者、繰返しの実験を要因として累積法により分散分析を行いA、Bグループ間に判定能力の差があるかどうかをみた。

結果　前身頃、後身頃では有意にAグループの判定能力が優れ、袖ではA、Bグループ間に判定能力の差がないことがわかった。しかし、Bグループでは個人差が大きく、判定能力に優れている者はAグループと同程度の判定能力を持っていることがみとめられた。